

詩篇8篇「人の子を顧みる神」

1A 幼子、乳飲み子の口 1-2

1B 主の御名の威光 1

2B 打ち立てられる力 2

2A 天における神の指 3-4

1B 天の大きさ 3

2B 顧みる神 4

3A 御手の業を治めさせる方 5-9

1B 栄光と誉れの冠 5

2B 万物の支配 6-9

本文

詩篇8篇を開いてください。私たちの学びは、詩篇六篇から十篇までを午後に読んでいきたいと思えます。今朝は、第八篇に注目していきます。

私たちは今週、木曜日から土曜日まで、神奈川の足柄のキャンプに行ってきます。そこで楽しみなのは、夜空であります。東京のネオンでは見ることのできない星々をきれいに眺めることができるでしょうか？詩篇第八篇の著者ダビデは、天を眺めて、そのすばらしい神の働きを見て、その御名をほめたたえています。

1A 幼子、乳飲み子の口 1-2

1B 主の御名の威光 1

1 私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたはご威光を天に置かれました。

ダビデは初めに、「私たちの主、主よ」と呼んでいます。新改訳の聖書は、太字になっている主はヤハウエという名であります。「一つになる」という意味があり、私たちの必要と一つとなってくださる方です。そして初めの主はアドナイであり、主人の意味の主であります。ダビデは初めに、自分に個人的に関わってくださる方、ヤハウエが、自分の主人であることを告白しています。そして、天を眺めて、その天体にある素晴らしさを見て、ヤハウエの神の名はなんと力強いのだろう、すぐれているのだろうと感嘆しているのです。

私たちが生まれてくると、そこは人々に囲まれた社会の中にいます。そして、生まれた時から人々との関係の中で生きなければいけません。横のつながりによって生き、他者との比較の中で生きています。けれども、他者との関わりから外れて、自分は一体何なのだろうと思う時がありま

す。それを「アイデンティティー」と言いますが、英語ですね。アイデンティティーは、何と自分を一体化させるのか、何をもって自分が自分と言えるのかという意味合いの言葉です。日本語は英語を採用していますが、韓国語は「正体性」と書きます。自分の正体は何なのか、自分を造り上げているものは何なのか、ということです。

しかし、人は元々、人との比較によって生きていませんでした。神がおられ、そして神が人に関わってくださることによって自分を生かしていました。罪を犯す前のアダムとエバです。私たちは品川家庭集会で、創世記1章の天地創造の第一目までを学びました。そこから分かるのは、日本に数多くある多くの宗教とは大きく異なり、人がどのように振る舞えばよいかという話は一切ないのです。神がいかに存在して、神がいかに天地を造られたのか、神がどのような方で何を行なわれたのかについてしか、書かれていませんでした。神のすばらしさ、神の名に注目が寄せられているのです。この中に立つときに、神を見て、神が自分に関わっておられるのを見て、それで初めて自分が何であるかを知ることができます。

ところが人間は、自分が誰であるのかを人と比べているので、いつまでも不安が付きまといまいます。ある時はうぬぼれます。自分はなかなかできています。ある時は落ち込みます。自分は何もできていない、こんなにできていないと思います。自分を比べるべき相手、真に相手に目を向けていないので、そのようになってしまうのです。しかし、ダビデは天に目を向けました。そこにある神の威光を見ました。そしてヤハウエなる神、自分に関わってくださる神がおられて、この方が私を支配しておられることを知りました。

2B 打ち立てられる力 2

2 あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。それは、あなたに敵対する者のため、敵と復讐する者とをしずめるためでした。

ダビデは驚くべき告白をしています。幼子と乳飲み子たちの口によって、どうやって敵どもを静めることができるのでしょうか？しかし、神はこれを行ってくださいます。神は、敢えて弱き者、小さき者を用いて、ご自分の力ある業を行われます。

イエス様が、この詩篇の箇所を引用されて、祭司長や律法学者に言い返しました。イエス様がエルサレムに、ろばの子に乗って入城されました。群衆が、「ホサナ！」と言って、歓声を上げてイエス様をお迎えしました。そして宮に入られました。そこにある両替台や鳩を売る台を倒して、「わたしの家は祈りの家と呼ばれると、書いてある。」と言われました。そして盲人や、足なえを癒されます。そこで、宮の中で子供たちが、「ダビデの子にホサナ。」と言って叫んでいたのです。それに腹を立てた祭司長と律法学者に対して、『『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された。』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。(マタイ 21:16)』と言われました。

このような小さな子たちが叫んでいる「ダビデの子にホサナという口」が、いかに力ある敵をも静めることができるというのです。ここから、その子たちがそのような力があるのではないことは明らかです。むしろ、神ご自身が敵対する者を静めてさせてくださり、そのことを小さな子たちが信じて、受け入れて、喜んでいるということです。

なんとすばらしい神の御業でしょうか？ イエス様は、同じように弟子たちを幼子と呼ばれました。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。(マタイ 11:25)」弟子たちはただ、イエス様を信じているだけです。そして、主がなされることを喜んでいるだけです。主は、このような者たちを喜ばれて、このような者たちを通して、神の国を拡げるように定めておられます。「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。(1コリント 1:27-28)」

2A 天における神の指 3-4

1B 天の大きさ 3

3 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、

天をダビデは今、見上げています。今は裸眼では、約五千の星を眺めることができるそうです。ダビデの時代には、もっと多く見ることができたかもしれません。望遠鏡では、二百万の星を見ることができるとのことです。そして大型観測機では、十億もの星を眺めることができるとのこと。宇宙は大きいので、光の速度で動いても四百億年の月日が経つとのこと。これらのものが、神の指によって造られたということが、圧倒されます。しかし、そこで私たちは、もっと圧倒されることがあります。

2B 顧みる神 4

4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

天体を眺めて、そのあまりにも大きさを見て、人があまりにも小さいことが分かります。ここで「人の子」とダビデが言っているのは、弱き者とも訳すことのできる言葉です。あまりにも小さく、弱い存在であるのに、神は顧みてくださっているのです。この「顧み」は世話をしてくださる、個人的に関わってくださるという意味です。先ほど話したように、ヤハウェの神は私たちの必要になってくださる方なのです。

なんとすばらしいことでしょうか！ 私たちの価値は、この神の心遣いに基づいています。他の何

物にも抛らず、神が顧みてくださっているところに抛ります。偉大なのは、この天でさえ収めることのできない大きな方、偉大な方、力ある方が、このような小さき者に関わっておられるということです。私たちは、こんな小さなことは神に言わなくても・・と躊躇するようなことがらも、神は御思いを持っておられます。「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。(詩篇 139:17-18)」その偉大な奥義を成し遂げられたのは、もちろん全能者であられる方が人の姿を取って、私たちに現れてくださったからに他なりません。

私たちの生きている社会は、私たちを人間的に良いものに見せようとさせる価値観にあります。より力ある者、より高い者に向けさせる社会です。女性の化粧や流行、男性のボディービル、数々の資格や技能、学問や知的活動など、これら一つ一つそれ自体が悪いものではありません。しかし、それが自分の価値を確認するところの抛り所となっていけないのです。ですから、私たちは絶えず戦いの中にいます。敵どもがいます。神の視点から目をそらせる力に対抗せねばなりません。

しかしこれらの美、力、知性のすべてを持っておられる方、すべてに超越しておられる方は、何に心を留めておられるかということ、弱き人や貧しき人、疎外されている人なのです。低められている人に、いつも心を留めておられます。イエス様が反応される人を思い出すと良いでしょう。十八年間、背をあげることでできない女を癒されました。遠くから眺めて、桑の木から眺めていたザアカイに目を留められました。同じように生まれつきの盲人をじっくりとご覧になりました。イエス様の視点は、いつも弱き者であったのです。

3A 御手の業を治めさせる方 5-9

1B 栄光と誉れの冠 5

5 あなたは、人を、神よりいっくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

ここにも、神によって成り立っている人の価値が書かれています。人は、神よりいっくらか劣ったものです。神の形に造られたものです。「われわれに似せて、人を造ろう」と神は言われました。私は伝道する時に、しばしば人にこのように尋ねます。「人を殺すのは悪いことですか？」悪いことだと答えます。「けれども、動物は殺していますよね。動物を殺すのと、人を殺すのではどちらが刑が重いですか。」もちろん、人殺しが刑が重いです。そして、「どうしてか？」と尋ねます。答えられないのです。動物を殺すのは良くて、人を殺すのは間違っているなら、その違いは何か？ということです。そこで、「神のかたちに造られたから」と言うことができます。主がノアに対して言われました。「人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人のかたちにお造りになったから。(創世 9:6)」神のかたちに造られているから、その命は尊いのです。

そして、「これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」と言っています。どんな小さき者であっても、そこには神の与えられる栄光と誉れがあります。もし、私たちがこの栄光と誉れを知っているなら

ば自分をこれ以上高めようと努力することから解放されるのです。すでに、神によって栄光と誉れが与えられているのですから？自分の価値を他者と比較して確かめる必要もなく、いや、自分自身で見出そうとする必要もなく、神ご自身が認めておられます。

私がほっとする場合があります。それは、教会です。皆さんの顔を拝見する時に、自分を良く見せなくてよいのだというほっとした気持ちがあります。そして、信仰を持ったばかりの時に避難所のようにしていたのが、大学のキャンパスでクリスチャンの祈り会に出席したときのことです。大学のキャンパスでは、まるでファッションショーではないかと思われるほど、女子学生は服装と化粧で身を固めていました。その時にお昼間に祈りに行くのです。そこにいる姉妹たちが、とてもきれいに見えました。けばけばしくないのです。決してみすぼらしくしていません。むしろ自然な身なりをしていて、神から与えられたその美しさを生かしている感じでした。

そして教会では、自分の弱さをもって主の前に来ることが求められているので、だからこそ主の栄光がそこに輝いています。

2B 万物の支配 6-9

6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。7 すべて、羊も牛も、また、野の獣も、8 空の鳥、海の魚、海路を通うものも。

神が人を造られた時に、天体を造られたその大きな神が、小さな者にご自分の造られた全てをお任せになりました。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。(創世 1:28)」どのようにして、こんな大それたことができたのでしょうか？アダムが、土から造られた者に過ぎない者がどのようにして万物を治めることができたのでしょうか？彼は、ただ主なる神を見上げただけです。この方に目を向けて、その神の語りかけに応えていただけで、彼は万物を治めることができました。なぜなら、神がこれらの統治を行ってくださるからです。アダムは小さいですが、アダムが神を見上げることによって、神がアダムによって万物を治めてくださいます。

しかし、今、私たちはこのようなシンプルで、素朴な生活を歩んでいるのでしょうか？主なる神を見上げて、ただ主との交わりを持つだけで喜んでる生活を営んでいるのでしょうか？そこから、主が任せられたものを治めていく力が現われます。主は大きな者を必要とされません。弱き者、小さき者を用いることを願われています。

ところが、シンプルに生きていたアダムは、妻のエバが蛇に惑わされたことによって罪を犯しました。それは、神のように賢くなるという、惑わしでした。主に目を向けなくても、自分で治めていこうとする誘惑です。それで、その罪に陥り、それ以来、自分自身でやっぴいこう、自分本位で生きて

いこうと変わったのです。それで今、人が万物を治めている姿を見ることはできていません。むしろ、サタンがこの世界を治めています。

しかし、この神のかたちは回復されつつあります。それは、クリスチャンによってです。ヘブル人への手紙に、この詩篇の箇所が引用されています。「ヘブル 2:6-10 むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。「人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょうか。人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょうか。あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。」万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの痛みを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。」

イエスが神の栄光の輝きそのものであられましたが、人の姿を取り、死の痛みを味わわれました。私たちの罪の供え物となってくださいました。そして、よみがえられました。そして、天に昇られて、神の右の座に着いておられるのです。この方に冠が置かれています。このキリストの内にいる時に、私たちは本来の神の栄冠を回復します。神の形に造られたように、ただキリストにあって神を見上げ、神との関わりの中で生きることができます。キリストご自身を私たちが見つめる時に、人としてのキリストをじっくりと見て、本気でこの方にしがみつき、この方が言われているとおりに行い、この方に従うなら、キリストへの奉仕の働きはたとえ小さく見えても、神はこの世界を治めるほどの偉大な働きへと変えてくださるのです。

その完成は、キリストが戻ってこられて私たちを栄光の姿へと変え、キリストと共に地上に戻ってくる時であります。

8:9 私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。

ダビデは、1 節と主の御名への賛美でこの詩をしめくっています。幼子や乳飲み子の賛美によって、どうして敵を打ち倒すことができます。

ある人がこんなことを言いました。「最も弱き聖徒がひざまずくとき、サタンは震えあがる。」自分はいかに小さく、価値のないような者に見えても、そしてクリスチャンとしてしっかりしていないと見えても、神の前にひざまずき、神に服従する時、この世の支配者であるサタンはおじげつのです。この言葉を言った人は、「ウィリアム・クーパー」と言います。彼は讚美歌集にあるような讚美を作

詞し、詩を書く有名な人でした。けれども、彼はうつ病に悩まされていたのです。彼の牧師であり、また友人でもあったジョン・ミュートンが、あの「驚くべき恵み(アメージング・グレイス)」で有名なジョン・ニュートンが、愛と忍耐によって彼を励まし、その会衆も彼のためにいつも祈っていました。彼は自殺未遂も計りましたが、当時はもちろん薬もありませんでしたが、自殺を試みることはなくなり、時々、症状は出ることはありましたが大きな衝動はなくなったのです。

この「最も弱い聖徒」というのは、クーパー自身のことでした。彼はとても弱かった、けれども主は強い方です。この方をほめたたえ、この方に感謝を捧げ、その働きをしている時に神がその偉大さを人々に示してくださいました。神は私たちのありのままの姿を顧みてくださいます。